

主日礼拝説教「『天の国』に至る道」予稿

日本基督教団石神井教会 2017年2月12日

【旧約聖書日課】イザヤ書 30章18～21節

- 18 それゆえ、主は恵みを与えようとしてあなたたちを待ち
それゆえ、主は憐れみを与えようとして立ち上がられる。
まことに、主は正義の神。なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は。
- 19 まことに、シオンの民、エルサレムに住む者よ、もはや泣くことはない。
主はあなたの呼ぶ声に答えて、必ず恵みを与えられる。
主がそれを聞いて、直ちに答えてくださる。
- 20 わが主はあなたたちに、災いのパンと苦しみの水を与えられた。
あなたを導かれる方はもはや隠れておられることなく
あなたの目は常にあなたを導かれる方を見る。
- 21 あなたの耳は、背後から語られる言葉を聞く。
「これが行くべき道だ、ここを歩け、右に行け、左に行け」と。

【使徒書日課】テモテへの手紙一 4章4～16節

4というのは、神がお造りになったものはすべて良いものであり、感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはないからです。5神の言葉と祈りとによって聖なるものとされるのです。

6これらのことを兄弟たちに教えるならば、あなたは、信仰の言葉とあなたが守ってきた善い教えの言葉とに養われて、キリスト・イエスの立派な奉仕者になります。7俗悪で愚にもつかない作り話は退けなさい。信心のために自分を鍛えなさい。8体の鍛錬も多少は役に立ちますが、信心は、この世と来るべき世での命を約束するので、すべての点で益となるからです。9この言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。10わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです。

11これらのことを命じ、教えなさい。12あなたは、年が若いということで、だれからでも軽んじられてはなりません。むしろ、言葉、行動、愛、信仰、純潔の点で、信じる人々の模範となりなさい。13わたしが行くときまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。

14あなたの内にある恵みの賜物を軽んじてはなりません。その賜物は、長老たちがあなたに手を置いたとき、預言によって与えられたものです。15これらのことに努めなさい。そこから離れてはなりません。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。16自分自身と教えとに気を配りなさい。以上のことをしっかりと守りなさい。そうすれば、あなたは自分自身と、あなたの言葉を聞く人々とを救うことになります。

【福音書日課】マタイによる福音書 5章17～20節

17「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。18はつきり言っておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。19だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするようにと人に教える者は、天の国で大きい者と呼ばれる。20言っておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

「なんと幸いなことか！」

先日の「聖書と祈りの会」の中で、礼拝の終わりに牧師が告げる祝祷、祝福の言葉が話題になりました。わたしは、最近の教団の多くの教会で用いられている「派遣の言葉」と「祝福の御言葉」を組み合わせて祝祷を告げていますが、「祝福の御言葉」の一つが旧約聖書・民数記にある御言葉であるということをご存知でない方がいらっしゃったので、ご一緒に開いて確かめたのです。

礼拝の終わりの「祝祷」とは「祝福」のことです。わたしが青年時代、日曜日に教会に来るには来るけれども、礼拝には大幅に遅刻して終わり頃にやってくる青年が幾人もいましたが、祝祷の前に歌われる讚美歌（頌栄「父・御子・御霊の…」）までに大慌てで礼拝堂に飛び込んできて、祝祷に間に合えば、礼拝に出たつもりになっていたからです。年配の信者の中には、そのような青年たちの振る舞いを苦々しく思っている方もいらしたようですが、当時の主任牧師は、青年たちに何の咎めるようなことも言われませんでした。それどころか、祝祷だけのために礼拝に現れた青年たちのためでしょうか、ここぞとばかり本当に言葉に力のある祝祷を告げてくださっていたように、思い返されます。

わたしも、牧師になり、礼拝ごとに祝祷を告げるようになって、あの当時の牧師の思いが分かるような気がするのです。最後の祝祷だけでも良いから、礼拝にあずかってほしいのです。そのような一人のことを拒む理由はありません。使徒ペトロが「祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです」（Ⅰペト 3:9）と教えているとおり、わたしたちは、礼拝に召された者として、一人でも多くの人に「神の祝福」を告げ、祈り、あずかっていただきたいと願う者だからです。

今日の旧約日課・イザヤ書に「なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は」と告げられています。「なんと幸いなことか／いかに幸いなことか」。旧約聖書の特に詩編などで繰り返し出てくる、祝福を告げる御言葉です。今日の福音書日課・マタイ 5章の「山上の説教」の最初で、主イエスが繰り返し「〇〇の人々は、幸いである」と語られたのは、旧約の「なんと幸いなことか」という祝福を告げる御言葉に倣ったのだと言われます。主イエスは、御教えの初めに、ご自分の前に集められた人々に向かって、祝福を告げる御言葉を発されたのです。

それは、ただ旧約で繰り返し用いられたあの祝福の言葉に倣ったというだけではなかったかもしれません。旧約聖書全体が、神の祝福、お造りになられた天地万物をご覧になられて「良しとされた」（創 1:4 以下）との御言葉から始められていることに、主イエスは倣われたのではないのでしょうか。

「一点一画も消え去ることはない！」

「心の貧しい人々は、幸いである。…」（マタイ 5:3~10）。

主イエスは、このとき、山の上に登られて、近くに従ってきていた弟子たちと、遠巻きに集まってきていた多くの群衆と呼ばれる人々を前にして、この祝福の言葉を告げられました。そこに集まってきていた人々の中に、心の貧しい人々がいたのでしょうか。悲しむ人々がいたのでしょうか。柔和な人々もいたのでしょうか。主

イエスのもとに集まってきて、主イエスの前に自分の姿を晒した人々の一人ひとりをご覧になられて、主イエスは、できればその一人ひとりを祝福しようという思いで、このような祝福の言葉をお告げになられたのではないのでしょうか。

それはもちろん、二千年前のある日の山の上でただ一回行われたこと、ではないでしょう。主イエスはきっと、いつも、弟子たちや人々を前にして、祝福を告げることから御教えをお始めになられていたのです。そればかりか、今ここにいるわたしたちも、この、祝福を告げてくださる主イエスの前に進み出てきた者として、主のもとに集められ御前に己の姿を露わにした一人ひとりとして、主イエスのお告げくださる祝福の言葉を、ここで聞かせていただいているのです。

なんと幸いなことかと思えます。わたしたちは、主の祝福の言葉をいただくために、ここに集わせていただいているのです。

けれども、わたしたちは、この「幸いである」という主イエスの祝福の言葉を聞いて、それで満足してそれぞれの家に帰っていくわけではありません。主イエスが山上の説教で続けてお語りになられた御教えを、わたしたちも聞かないわけにはいかない。主イエスが「**律法や預言者**」とお呼びになられている旧約聖書の御言葉を解かれた御教えです。その御教えを聴くためにこそ、わたしたちは、主イエスの祝福の言葉をまず聞かせていただいたのです。否、主の御教えを聴くことができるのは、主イエスがまず祝福の言葉を告げてくださったからなのです。

前任地の教会でもそうでしたが、石神井教会に来て「やっぱり」と思ってしまったことがあります。皆さんの中に少なからず、「旧約聖書はあまり学んでこなかった」という方がいらっしゃるのです。前任地では、平日はほとんど毎日のように異なる集会がありましたが、その半分ほどは旧約聖書を取り上げて学ぶということをしていました。石神井教会では、まだ旧約聖書を通じて学ぶ集まりを始められていませんが、ぜひ早く始めたいと願っています。それは、何よりも旧約聖書こそが、主イエスがお読みになられていた聖書であり、初代教会の弟子たちが読んでいた聖書であるからです。

主イエスが、「**天地が消え失せるまで、律法の文字の一点一画も消え去ることはない**」とおっしゃられた旧約聖書の御言葉。主イエスは、その御言葉を解いて、この掟を守り、行うようと、お教えになられたのです。

「天の国」の「義」によって…

主イエスがどれほど旧約聖書の御言葉の教えを大切になさっていらしたのか。実際に、主イエスご自身が、どのように旧約聖書の御言葉をご自身のものとして守り、行われていらしたのか。わたしたちは、福音書を読み進めていくときに、少し戸惑うことがあるかもしれません。主イエスは、とても厳密に、旧約聖書の御言葉の表面上の意味以上に厳しい実践を求められるところがあります。一方で、安息日の規定などは、どこか無視していらっしゃるのではないかとお見受けすることもあるのです。実のところ、主イエスは、旧約聖書の御言葉の教え、掟を、どのように実践すべきだとお考えでいらしたのでしょうか。

主イエスが、旧約聖書の御言葉の教える「最も小さな掟の一つ」でも破ったり、破るように教えたりすることを、良しとなさらなかったのは、間違いありません。主イエスは、聖書の御言葉を取捨選択することなく、基本的にはすべてを神の定められたものとして、真正面から受け取り、守り、そうするべきだとお考えになられていらしたのに違いないのです。だからこそ、「**それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる**」ともおっしゃられた。

けれども、そのようにお教えになられる主イエスが、このときに重ねて強調されたのは、こういうことでした。「**言っておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。**」

律法学者やファリサイ派の人々のことを、主イエスは、15章や23章で非常に厳しく批判なさっています。彼らが聖書に基づいて教えることは、そのとおりに聞いて守るべきだが、彼らの実践を真似てはいけぬ。なぜならば、彼らは律法を教えるが、自分では決してそれを実行していないからだ。そのように、主イエスは彼らを批判し、偽善者と呼ばれるのです。そのような律法学者やファリサイ派の人々の義よりも、あなたがたの義のほうがまさっていなければいけぬ、と主イエスはおっしゃられたのです。

彼らはそれを実行していない、と主イエスは指摘なさいますが、では、わたしたちは、自分の実践と他の人の実践を比較して、どちらがより実行しているかと比較し、相対的に多く実行していればよい、ということなのでしょう。おそらく、そうではないでしょう。主イエスがここで「義」と言われていることは、「行い／実践」のことではなく、「関係性の正しさ」のことです。彼らは、どのような関係性の中に生き、教えを実践しているのか。あなたがたは、どのような関係性の中に生き、教えを実践するのか。そのことが問われている。

主イエスは、しかし、「あなたがたは天の国に入れぬ」とおっしゃられたのではないのです。「天の国は近づいた。わたしは、あなたがたの前に来た。あなたがたは今、天の国にいる」と、祝福してお告げくださったのです。主イエスの前に立つ者として、主イエスを通して神の御言葉を聞き、神の祝福にあずかり、神の御心に思い寄せることを喜ぶ者として、そのような関係性の中に生きる者として、つまり「神の義」の内に生きる者として、あなたがたは今、ここにいる。そのような者として、聖書の言葉を、神のお語りくださる御言葉を、ただ聞くだけで済ませられるか。聞いて、心に留めないではいられないのではないか。その御言葉の意味を、その御言葉をお語りくださった神の御心を、憶えないではいられないのではないか。自分も、そのようにしないではいられないのではないか。

主イエスに招き集められた教会の営みの中で、「あなたは良い」と祝福してくださる神の御言葉を、わたしたちは、神の御心として聞かないわけにはいきません。その御声の響きがいつまでもわたしたちの内でも響き続けるような聞き方を、しないわけにはいきません。その響き続ける御声の響きはいつか、わたしたちの思いを、言葉を、行いを、同じ響きのものへと造り上げていくことになるのです。